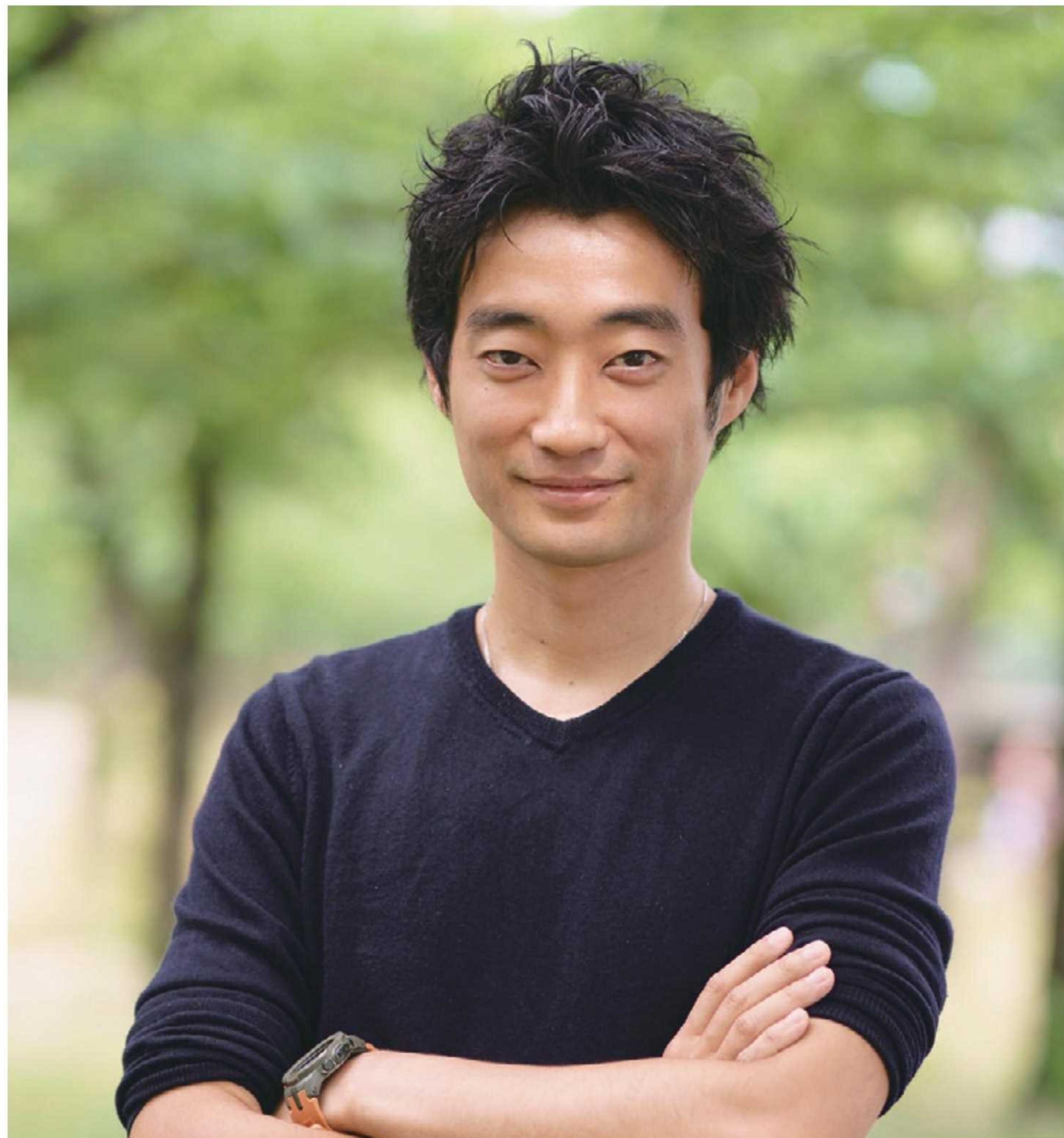


EFFECTOR

For an inclusive Society

To Encourage Community Engagement • Volunteering • Sustainable Solution

EFFECTORs フェスタ特別講演「分かち合う社会へ～自己責任論を越えて～」 事前対談特集号



いまい 紀明さん

認定 NPO 法人 D×P (ディーピー) 理事長

Profile

1985年札幌生まれ。立命館アジア太平洋大学(APU)卒。高校生のとき、イラクの子どもたちのために医療支援NGOを設立。その活動のために、当時、紛争地域だったイラクへ渡航。その際、現地の武装勢力に人質として拘束され、帰国後「自己責任」の言葉のもと、日本社会から大きなバッシングを受ける。結果、対人恐怖症になるも、大学進学後、友人らに支えられ復帰。偶然、通信制高校の先生から通信制高校の生徒が抱える課題を知る。親や先生から否定された経験を持つ生徒たちと自身のバッシングされた経験が重なり、大阪の専門商社勤務を経て、2012年にNPO法人D×Pを設立。「ひとりひとりの若者が自分の未来に希望を持てる社会」を目指して通信制や定時制高校などに所属する10代で生きづらさを抱える若者支援のコミュニティーをオフラインとオンラインで作っている。

NPOの未来を考えながら、資金調達や事業作りを実践的に学んでいくオンラインサロン「未来ラボ」を運営。

また、NPO支援の会社として株式会社SOLIOを2018年11月に設立し、様々な分野のNPO支援を展開している。



ふかお 昌峰

Ryukoku Extension Center センター長 龍谷大学政策学部教授
一般社団法人全国コミュニティ財団協会 会長
プラスソーシャルインベストメント 代表取締役会長

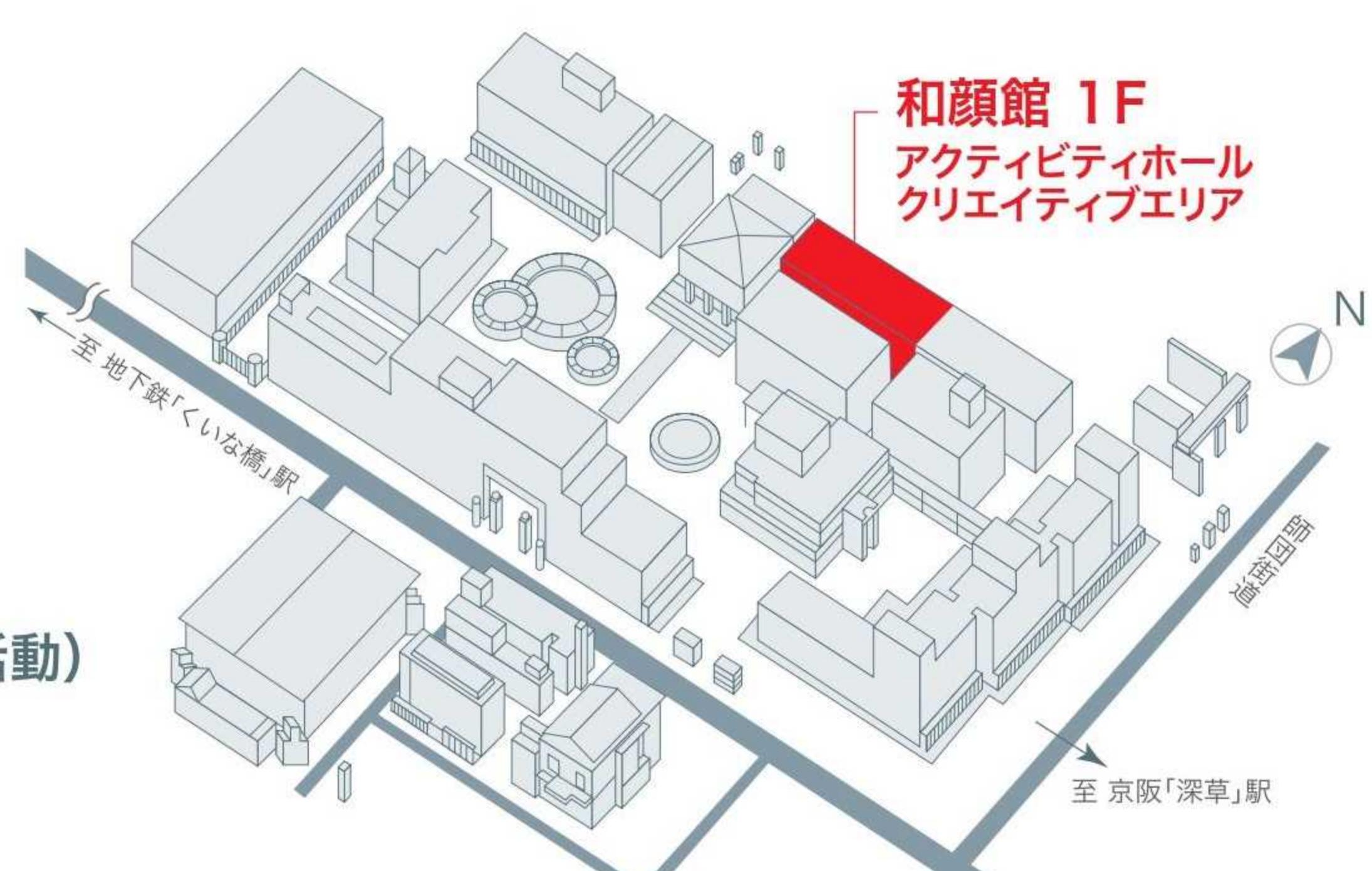
Profile

1974年京都府出身。滋賀大学在学中、阪神・淡路大震災を機にボランティア活動に参加。1998年にきょうとNPOセンターを立ち上げ、初代事務局長に就任。以降、日本初のNPO法人放送局の設立、公益財団法人京都地域創造基金の設立などに精力的に取り組む。2012年に社会的投資をデザインする非営利型企業の株式会社PLUS SOCIALを起業、代表取締役に就任。2016年4月にプラスソーシャルインベストメント株式会社を共同起業し代表取締役会長に就任。

龍谷大学EFFECTORs フェスタ 3.24(sun) 12:00～

■特別講演 今井紀明氏(認定NPO法人D×P理事長)
13:05～13:55
@和顔館1階アクティビティホール

■ポスターセッション(学生の社会連携活動)
12:00～15:35
@和顔館1階クリエイティブエリア



対談

変人×変人 — 変える人 —



深尾 今日は、「EFFECTORS フェスタ」で今井さんに講演いただくにあたり、対談をお願いしました。宜しくお願いいたします。

今井 宜しくお願ひいたします。

社会課題に取り組むきっかけ

今井 僕は高校まで札幌において、高校生のとき、イラクの子どもたちのために医療支援NGOを設立して、紛争地域だったイラクへ渡航し武装勢力に拘束されたんですが、その件で挫折している期間が長くあって、大学に進学してようやく回復したんです。

深尾 今から振り返ると、あの事件は今井さんにとってどの部分が印象強いのでしょうか。バッシングを受けたことでしょうか。

今井 バッシングの印象がやっぱり強いですね。拘束から解放された帰国後に、道端で殴られたり、罵声を浴びて、対人恐怖症のような状態になりました。

深尾 そこからの変化は何がきっかけだったのでしょうか。

今井 朴基浩という、のちのD×Pの共同創設者と会って、「自分のことなんて、誰も理解してくれない」と愚痴をこぼしていたら、朴に「でも自分で行動しないと何も変わらないよね」と言われたのが転換点だったかと思います。色々な後輩の支えがあって精神的に回復していきました。あと、大学のあった別府は、温泉があるためか癒やしのまちだったこともよかったです。深尾さんが地域に深く関わるきっかけは、なんだったのでしょうか。

深尾 僕が二十歳のときにあった阪神・淡路大震災ですね。大きな転機のきっかけとなったことの一つは、「何もできなかった」ことです。財産をなくしたり、子供を亡くして打ちひしがれている人たちに直接なんと声をかけたらいいかわからなかった。自分の小ささを見せつけられました。あと一つは、僕は祖父も父もサラリーマンで、いい学校に行っていい会社に勤めるのが幸せという価値観で育てられてきたのですが、被災地で避難所に行ったら、平日の昼間にボランティアをしているおっちゃんがいて、「世捨て人」みたいに見えたんです。

今井 カルチャーショックですね。

深尾 後でNPOの人と知るのですが、育った価値観と違う人が世の中にはたくさんいて、人のために頑張っている姿に揺さぶられました。僕の大学生の時は絶不調な経済状況で、モラトリアム的に大学院に行くことを決めて、出会ったNPOの人たちの基盤が非常に脆弱であることや、もっとオルタナティブなものをつくれるよね、と考えたのがスタートです。

今井 僕は大学卒業後に商社に入って、入社と同時に「自分より年下の世代のために仕事をしたい」とも決めていたので、商社で働きながら学校回りを始めました。通信制高校の先生と出会い、通信制高校の生徒の生きづらさを知ったことがNPO法人D×P設立のきっかけになっています。

現場で感じること

深尾 今井さんは今、高校生と接していく、どんなことを考えていますか。

今井 僕が支援している生徒は不登校や、高校を中退していましたり、経済的に厳しい状況にいる生徒が多いですが、ひとりひとりが可能性を持っていて、実際に変わっていくんですよね。生徒からたくさんのこと学んでいます。すでに働いて家計を支えているという子もたくさんいて、自分でお金を稼いで来ている分、とてもしっかりしています。

深尾 引きこもりの子はどうなんでしょうか。

今井 引きこもりの子たちは、考える時間がたくさんあるんですよね。考え方抜いて自分と向き合っていると思うんです。普通では持つことができない感性や考え方を持っていて面白いです。

深尾 イタリアで哲学者の人と話したときに、日本には「引きこもりという希望」がある、彼らが現代の社会構造に適応しにくいことを、ポジティブに「抵抗」と捉えることができる、と言われたんです。

今井 とてもいい言葉ですね。

深尾 人生を懸けて抗っていると捉えると、確かに現代社会の生きづらさみたいなものをきちんと示し、アラートしていると見て、非常に納得しました。その話を講義すると、300人の講義で20人位が不登校だったとか、虐待を受けてたと言ってくれる学生が出てくるんですね。当事者性を強みとして捉えるということを学生と一緒に考えています。

同調圧力がしんどい社会

深尾 学校について今井さんはどのように捉えていますか。

今井 高校生を見ていると、学校には空気を読まなきやいけない強い同調圧力があって、しんどそうだな、と感じます。思いきったことをしにくい場だと思うのですが、じゃあ学校から抜けてしまえばいい、学校に行かないという発想があまりないと思います。

深尾 学校へ行ってない子に対して「なんで?」とは聞くけど、学校に行っている子に「なんで学校へ行ってるの?」とは聞かないですよね。

今井 学校 자체は大切だと思うのですが、疑問や、思いついたことがあれば直感的に学校を出て、自分でコミュニティを形成するのも良いと思います。与えられるのではなく自ら行動することが最も重要であり、やりたいことをするための方法論は後で学べると思うんですよ。

深尾 今井さんがイラクに行き社会からバッシングされたのも同調圧力と関連すると思うのですが、社会や学校のあり方は変わっていますか。

今井 同調圧力が日本で非常に強いことは基本的に変

わっていないと思います。変わらないからこそ、学校教育で学校から出るという選択肢があることを示すことが大事だと思います。

深尾 本学では、「お膳立て」され、予定調和のゴールが用意されているのではなく、学生自身の社会的な課題に対しての挑戦を応援する、「龍谷チャレンジ」という取り組みをしています。どんどんチャレンジして、いろんな失敗をしてもらいたいんですよ。高校生とか大学生は「ごめんなさい」って言ったら大概のこと許されますよね。そういう大学の過ごし方があることを高校生にもイメージしてほしいですね。

若者の持つ力

今井 クラウドファンディングを使ってネット上で広く資金を集めている姿を見ると、昔の互助の概念を今の若者たちは体現していて、今後社会保障に近い仕組みになっていくのではないかとも思っています。

深尾 若い世代はシェアがうまいし、所有や独占にあまり執着がないから、多くの人から受け入れられますよね。もっと社会がポジティブに位置付けたほうがいいと思うんです。例えば今の若い子たちは、車は走ればいいと思っているのを「所有欲がなく、弱々しい、頼りない」と捉える風潮もある。でも、その感覚はこれからの時代をつくる“すべ”であり、色々な可能性があると思うんです。

今井 一つ気になるのは、いわゆる“やんちゃ”と呼ばれる生徒が少なくなってきたことで、怒りや悔しさ、喜怒哀楽みたいなものが発散できないのかもしれない感じています。平和的過ぎる一面もあって、疑問を持ち、本当にそれでいいのかと敢えて大人にぶつけることが重要だと思います。コミュニティが細分化されているから、共通の価値観がないと思うし、共通で語ることができる雰囲気をつくっていくことが大事だと思います。

最後に

深尾 私は今40代で、今井さんは今30代ですが、どういう40代をイメージされてますか?

今井 6年後になりますが、海外で事業を展開したいと思っています。日本の若者の状況は他の国も当てはまり、例えば韓国ではより深刻かもしれないです。若者支援をアジアでしたいと考えています。

深尾 確かに構造的に同じ問題があると思います。ネパールの薬物依存の人のケアに関わっていて、経済成長を急速に遂げ中流層が生まれる中で、日本と同じ“ひづみ”が若者に影響を及ぼし始めています。今の日本の経験が、アジアや新興国で活きてくると感じました。

深尾 強い原体験を持ち前に進み活躍する今井さんを応援しています。本日はありがとうございました。

今井 政府ができない領域が多く存在しているからこそ、頑張りたいと思います。ありがとうございました。